

編集室から

先週、仙台から東京・福岡と、日本を縦断する出張がありました。仙台は寒く、東京は金沢とあまり変わらず、福岡はさすがに春を感じさせる暖かさ。厚手のスーツとコートで汗だくになりました。

受験生の親としては、合間にちょっと無理をして太宰府天満宮へ参詣。最後にお訪ねしたのは学生時代のはずで、二十年以上はご無沙汰していただきましたので、参道の記憶も殆どありません。飛び込みでお土産に買った梅が枝餅は、家族に大好評。夜は、ホテルに紹介してもらった駅前の「水たき」専門店に。水たきってこんなに美味しかったんだと、感心しました。予約なしで開店早々に行ったのですが、予約のため2時間限定。それでも大満足し、女将さんに見送られながら博多駅前を気持ちよく歩きました。

博多駅は九州新幹線開業に合わせた大改築中でしたが、そのコンコースの柱を背に、お巡りさんが立って、大声で通る人々に挨拶・声掛けをしています。ほとんどの人が返事も会釈もしない工事中の廊下に、彼の通る声が響いていました。素晴らしいことですが、簡単にできることではありません。思わず頭が下がりました。

帰りの新幹線でのお弁当は勿論、折尾名物「かしわめし」。鳥の茶色、卵の黄色、海苔の黒色の三色の鳥飯に懐かしさ一杯です。折尾は、母の郷里に近い分岐駅で、小さい頃、帰省の際は、母に手を引かれこの駅で必ず乗り換えたものです。その時間いたのでしょう。弁当売りの声が今でも耳の底に残っています。(は)



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2009/03
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>
〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp



2009/03
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

弥 生



福岡・太宰府天満宮にて
by hama

寄稿 『幻の酒「花の香」復活物語』

東東京学芸大学 学長 鷺山恭彦

遠州は土方村の我が家で江戸末期、「花の香」という酒が造られていたという。それを復活させようという話になったのは、本紙十月号執筆の杉浦清司さん、役場の深谷孝さん、郵便局の青野貞紀さんたちと、たまたま一緒に「開運」で知られる土井酒造を訪れたのがきっかけだった。

お互いに顔見知り程度であったが、即座に「やろう」という話になった。「天の時、地の利、人の和」というが、本当にそれが揃う時があるのだ。

「幻の名酒復活」と銘打ち、知り合いに声を掛け、知人が知人を呼び、あっという間に三百人の会員が集まり、静岡県のみならず、愛知、長野、東京、大分と広がった。「花の音楽会」の創立である。

古戦場で知られている高天神城の麓で行われた「田植え」には百名が参加。労働の後は、海・里・山の幸の大交流会となった。

第一楽章「田植えと若菜の宴」、第二楽章「稲刈りと秋の味覚の宴」と洒落たプログラムを構想したのは、これまた本誌十一月号に書いている横山忠志さんである。続いて、第三楽章「くい飲み作陶の集い」、第四楽章「酒仕込み蔵見学」、最終楽章「陶酔の宴」と続き、みんなの工夫で大きな盛り上げの内に進んだ。

杜氏の波瀬正吉さんに「やや辛口の「ク」のあるすっきりしたお酒」と頼んだ。思ったとおりの味だったのには本当に驚いた。

「陶酔の宴」には石川嘉延静岡県知事夫妻も参加。「楽会が皆さんの知恵と力でここまでできたことは素晴らしい。地域の力をつけるためにますます頑張っ

てほしい」と挨拶した。「出会い、ふれあい、ホットなニュース」という。百三十年ぶりの復活は、いろいろな出会いと交流と物語を生んだ。こつした体験が私たちの新しい生活の質を作っていく。

今年で三年目を迎えた。宝塚の「ヌミシの花咲く頃」を作詞した白井鐵造の郷里・春野町との交流、炭窯つくり、炭焼き体験、掛川の里山復元、等々、多彩な出会いが新しく生まれた。

三月二十一日は第三回「陶酔の宴」が開かれる。関心のある方は、

広報担当の太田 (054-745-4639)

または、「酒のすぢねん」(0537-72-2575)まで。



【プロフィール】
(わじやま やすひこ)
国立大学法人 東京学芸大学学長。
一九四三年生まれ。掛川市(旧小笠郡土方村)出身。二〇〇三年十一月より現職。著書・共著「転形期の思想」梓出版など「花の音楽会」主宰

濱のいざなわ 『フシ無』

世は激動している。このような時にあってリーダーの重要な資質の一つに「フシ無」(フシがない)ことが挙げられるようになった。

ところで、では「フシ無」(フシがない)とは一体どういったことなのか。

すぐに浮かぶのは、強い信念を持つこと。如何なる事態が立ち現れようとも微動だにしない信念。それに裏打ちされた確たる言動は、常に一貫性を持ち、決して向きを変えることが無い。その信念と言動は、あたかも強靱な鋼鉄で鍛えられた太い軸・柱のようなイメージである。しかし、これで本当に「フシ無」ののだろうか。

一々現れる邪魔立てに対して、まともに向き合っていない。時間は費やされる上に、疲れる(この上ない)。相手もひとかたならば、そこで矢尽き・刀折れるかも知れぬ。となれば、目指すところへは辿り着けぬままに精魂果てるに至る。

一番の目標は、目指すところへ到達することであったはずだ。が、途上で現れる邪魔立てに気を取られ、いつの間にかそれらを取り除かねば目的を達せられないと思いついてしまう。

これでは、邪魔立ての思う壺ではないか。

「柔よく剛を制す」

達観である。すすすいと障害物をかわし、最終的には

目指すところへ向かって弛みなく進む。それはあたかも、風や水の如く。

若に遭遇した流れは、一時的に大きく向きを変える。しかしそれは、より先の進むべきところへ向かう最短経路を採っている。邪魔立てする岩の周囲だけを見ている、まるで「フシ」しているかに見えたとしても。

「局所最適は、全体最適とは限らず」
科学、特に計画や最適解とは何かを学んだものなら初めに教えられる原理だ。

にも関わらず、巷の何と些細な点にのみ論を張るもの多きことか。

君。答えはそんな処には無いのだよ。
限定された中での議論は精神的に楽である。条件が限定的であるほど、仮説は成立させやすい。これもまた、科学の基本。文理の壁等という些細な隔てを越えて、伝えなければならぬ真理がある。

激動・激流の時代であるからこそ、近視眼的に「フシ無」(リーダーではなく、やがて大流となるべき流れの果てを見極め、柔として邪魔立てに邪魔されること無く、滔々と進める資質が尊いのではないのか。

事の大小を問わず邪魔立ても、彼らの必要性からそこに頑を張っている。それはそのままにして置けばよい。流れが去った後、独り取り残されるもまた、自ら選んだ結果である。

この時代、自他共に如何にあるべきか。余程眼力を養わねば、易きに堕しかねない。用心用心。

『「100年に1度」という枕詞』

(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

昨年の秋以来、100年に1度の恐慌とか言われて、不況風が吹きまくっている。僕の周りでも景気のいい話はとんと無くなってしまった。

とはいうものの、東京の街を歩いていても、浮浪者と思われる人の姿をあまり見かけない。バブル崩壊後の1993年当時の東京では、地下街を歩くと、それこそ段ボールハウスが延々と続いていた。そしてホームレスの人たちが、そこかしこでたむろっていた。

最近の東京では、地下街で段ボールハウスを作ることが禁じられているのでからかもしれないが、派遣切りにあった人達は、いったいどこに行っているのだろうか？ 何らかの宿泊施設を行政が用意して、みんなそこにいるのだろうか？ よく分からない。

今回の不況は、東京のような大都市ではなく、自動車関連、家電関連の工場が多くある、地方直撃型不況なのかもしれない。だから、東京では職にあぶれた人が増えている、という状況になっていないと思ったりもする。

それにしても、自動車の売り上げダウンは何なのだ？とってしまう。昨対40%ダウンというのは、何と言う数字なのだろう。それだけみんなの財布の紐が締まっているということなのだろうが、これがしばらく続くとするならば、これまでの数字は一体何だったのか？とってしまう。

つまり作り過ぎていた。要するに無駄に作って、無駄に消費していただけと言うことかもしれない。とするならば、今回の不況によって、資源の無駄遣いに歯止めがかかったとも言える。地球環境という観点で考えれば、今回の不況はいいことなのかもしれない。

ところで、100年に1度の金融恐慌と言うけれど、こんな恐慌が人類の歴史の中で100年ごとに繰り返されているのだろうか？ おそらく、1929年の世界恐慌に準じるという意味で言っているのだろう。でも19世紀や18世紀ではどうだったのだろうか？ 日本で言えば1990年代後半の山一証券や拓銀が吹き飛んだ時と同レベル、あるいはその時よりややまし、という気がするけどどうだろう。

ならば、10年で2回目の金融恐慌ということになる。1992年にはイングランド銀行がポンド危機に直面しているし、アメリカだって1998年にノーベル経済学賞受賞者が設立したLTCMが吹き飛んでいる。また同年はロシアが債務不履行宣言をしている。まあ、これまで積もりに積もったものが吹き飛んだ、ということなのかもしれない。

しかし、日本のこの100年間で言えば、第2次世界大戦当時の方が、よほどひどかったように思える。

思うに、「100年に1度」という枕詞を、言い訳にせず、惑わされず、ということが大切なのではないだろうか？

『モチベーションの上げ方』

合同会社アイアイシー 山田 純

“興（おこし）”という、手作り神輿で町おこしをする会を作り4年ほど経ちます。その興（おこし）でイベントや他の団体に助っ人に入った時など、色々な方とお話をさせていただきました。そんな時、興（おこし）を見た方からモチベーションの上げ方について質問されます。

確かに興（おこし）のメンバーは異常にモチベーションが高く、今は勝手連ですが、いつか起業するのか？と思うほど熱のこもった戦略会議をよくしています。自分が仕掛けた事ですから、具体的な方法はもちろん分かっているのですが、私は理工系の出身の為かボキャブラリーが足りず、上手く伝えるというのが苦手で答えにはなってなかったと思います。

ところが最近、ある方のお話を聞いて、解りやすい説明を覚えましてので、さっそく使わせていただこうと思います。私自身を含め20代30代位を【ジャンプ世代】とここでは呼ばせて頂きます。ジャンプ世代の“ジャンプ”とは飛び跳ねるという意味ではなく、週刊少年ジャンプの“ジャンプ”です。小・中・高・大学または今現在まで含むとジャンプを読んでいる・又は、いた20代・30代は大多数を占めます。

なぜ、数あるコミックの中でジャンプが圧倒的な支持を得ているのか？それは『ドラゴンボール』『ワンピース』『NARUTO』等の歴代ヒット作に以下の共通点があるからです。

- ・ 主役のキャラクターがリーダーとなり巨大な壁を打ち破る
- ・ 主役のリーダーがどこか抜けているが、心や芯にブレがない
- ・ そんなリーダーの周りに個性あふれる仲間が集まり力を合わせる
- ・ キーワードが仲間・友情

これらの要素をもつヒット作が出た時にジャンプは圧倒的な支持を得ているのです。この世代は思春期など多感な時期にジャンプを読み強く影響を受け、憧れをもった世代なのです。そんなジャンプ世代には、これらのポイントが自分に当てはまったとき、モチベーションが上がりとても力発揮するのです。

ちなみに、それ以前の世代は『巨人の星』『エースをねらえ』『アタックNo.1』に代表される【スポ根】と言われた世代ですので、プレッシャーや目の前の壁が高いほど『根性を見せてやる！』という感じでモチベーションが上がる傾向にあります。上司がスポ根世代、部下がジャンプ世代の場合、上司の勢いが強過ぎ、部下に対し『最近の若い奴は根性がない！』となる訳です、どちらが悪い訳ではなく年代に合ったモチベーションの上げ方があるのです。

ここまで読まれた方のほとんどが、次の世代は？と考えたと思います。私、自身も今、次の世代を見極めるために小・中・高生の言動に興味を持っている最中です。それはマンガでもアニメでもないかもしれないですね！常に頭を柔らかく保ち、その時に備えていたいと思っています。

『富士の国から ～大魔神のたび～ 夜の美術館と茶会』

静岡県観光局 溝口 久

如月の宵、掛川で和で遊ぶ「夜の美術館と現代アート茶会」なるものをやるから来ないか、限定12名、先着だけど情報発信力があって、いいか悪いかをはっきり言う貴方に来て欲しいとのありがたい誘いにノコノコと出掛けて行った。ライトアップされた掛川城天守閣は寒さ厳しい夜の帳の中にくっきりと浮かび上がっていた。

その足もと、二の丸跡に建てられているこじんまりとした美術館と、隣接する茶室が今晚の会場だ。まずは美術館へ。薨の屋根だけが光り、その存在はわかるものの、全ての照明は落とされ、玄関に置かれた行灯のみが入り口へと誘導する。外も夜だが、中も夜の美術館に入るのは初めてだ。受付には灯火があるものの誰が受け付けているのかもはっきりしないまま、名簿に自分の名前が確認できると会費2,200円の徴収があり、高輝度の発光ダイオードの懐中電灯を渡された。展示室に向かうと、そこには展示ケースに入れられた

「たばこ入れ」の数々。この「たばこ入れ」があなどれない。煙管筒、名刺入れの形をした「たばこ入れ」にその蓋を閉める前金具、根付に、これらの部品をつなげる紐、その長さを調整する「緒締



(おじめ)」といった6つの部品から成立ち、作る職人はそれぞれ違う。施主の趣味に合わせデザインをし、それをそれぞれの職人に発注するプロデューサー的な人がいて、江戸・明治の職人芸の粋を集合体にして一つの「たばこ入れ」を完成させるのだ。根付には象牙、金属、堅木の彫刻を、緒締(おじめ)、前金具には金をあしらひ、実に精密で見事な細工が施されて

いる。これに高輝度の懐中電灯を当てると陰影がくっきり、そして金の細工物が光り浮かび上がってくる。思わずその美しさに見とれた。やがて暗がりには浮かび上がる美を堪能することに今回の企画の狙いがあることに気付く。うーんなかなかやってくれる。わずか2室のさほど広くない展示室に1時間近くいることになった。たぶん、通常の実験館の環境で見れば、1/3以下の時間で出てくることになったろう。

美術館の後は「現代アート茶会」だ。茶室に前庭にある紅梅は満開、ライトアップされ、根元にある小さな池に紅梅の姿がそのまま映りこんでいた。振り返ればガラス戸にも、その姿が反射し、闇の演出が続く。路地を通り本格的な茶室ににじり口から入る。中には和蠟燭が部屋中を照らす。蠟燭の火と狭い茶室に押し込まれた12人が放つ体温が中を暖めた。ゆずの味がする煎茶が銘々に出され、お軸の説明があった。闇の中で要所のみが照らされ、花に、軸に、お茶に、皆の気持ちが集中し、これまでに経験の無い茶会となった。



この後、美術作家の中村ケンゴ氏が創ったアクリル製の“なつめ”を愛でながら、ワインに地元素材に徹底的にこだわったオードブルを頂戴しながら、お抹茶で締める第二弾の茶会が用意されていた。

掛川の夜に至福のひと時を過ごすことができたことに「掛川の現代美術研究会」に深く感謝する次第です。